

指導教員によるコメント

李洪伊氏は、近現代演劇をめぐる日韓比較研究を大きな研究課題としている。当該海外アカデミック・ディスカッションの目的は、その研究課題にそって、とくに現代演劇をめぐる研究言説の新しい方法の模索にあった。氏が博士論文の中心に置こうとしている新劇の研究においては、日韓比較を含めて、すでに先行研究の積み重ねがあり、研究言説の様式それ自体は確立している。しかし、現代演劇研究を研究の射程に含めようとする場合、研究言説それ自体の独自の構築が必要となる。それは研究文献による再構成では不可能であり、演劇の「いま・ここ」として体験されることが何より重要である。本プログラムを通じて、フランスにおける現代演劇上演の現場、ならびに観客の反応を直接体験できたことは、李氏にとって、博士論文執筆に向けての貴重な体験となったことは明らかである。とくに、氏がこれまで博士論文のキータームの一つとしてきた「メロドラマ」についても、実際のフランスでの上演の現場、さらには多くの知見を与えてくださったパリ第7大学のイ・ジンミョン先生の導きと授業参加の体験により、その研究用語自体に対する再考を余儀なくされている。これは、今回のプログラムによってもたらされた研究の進展であり、貴重な成果の一つと言えるだろう。

演劇研究においては、レーゼドラマのアプローチ方法には限界があり、たとえそれが過去のものであっても、上演の「現場」をどのように再構成しうるかという研究者の想像力が必須である。それらは、文字文献だけから習得されうるものではない。今回のような、アカデミック・ディスカッションの体験を通して、過去に遡及しつつ、演劇研究の方法それ自体が習得され、さらに新しい方法が創造されると期待される。

菅 聡子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授）